



波郷晩年 清水基吉

一

石田波郷は主宰誌「鶴」の選後評を、創刊の昭和十二年から書きつづけている。表題は「鶴俳句の選評」とか、「鶴の秀句」とかと変り、また、戦中、戦後のどさくさ時代に中断、休載したことはあったが、復刊後の二十八年からは「鶴俳句の諸作」として、四十一年七月号までつづけられた。

波郷が選句に当たって、どんな考えを持っていたかは、この「鶴俳句の諸作」に端的にあらわれている。大ざっぱに言えば、二十歳代の後半から、五十歳代までの年齢、境涯の変化と共に、波郷の俳句に対する考えがどんなふうに変化したか。或いは一向に変化しなかったかは、「鶴俳句の諸作」によって、うかがうことができる。

四十一年は前年の暮、呼吸困難のために清瀬の国立東京病院に入院、いったんは帰宅したもの、五月になって「病変」を起こし、七月には五回目の入院をしている。七月号の「鶴俳句の諸作」は、やや小康状態にあった四月の末に書か

れたもののような。

二十三日の午後、自宅に來客があつて、あわただしく暮れた夕食後、そのまま食卓にいた八時頃に星野麥丘人からの電話で、女流の旗ことの急逝を知らされた。「これには私は驚かざるを得なかった。自分で医者の家に出かけて、結局、そこで息を引きとったという。話の様子を綜合すると、日頃から本人も心配していた通り、低肺機能者の宿命的におちいる心臓障害である。私なども順当にゆけば、必ず、それで死ぬにちがいないと思っている経過である」と書いている。

他人事のように記しているが、波郷は三年後の四十四年の十一月二十一日の早暁、ベッドの裾に倒れるようにして死去していたのであつた。満年齢で五十四歳であつた。死亡診断書の病名は心衰弱、肺性心、肺結核であつたそうだが、死因は当人が予期したごとく「低肺機能者のおちいる心臓障害」であつたと思われる。

「晩年」とは辞書を引くと（引く必要もないが）、「その人の一生の終りの時期」ということになっている。普通、「そ

の人」は、いつ、一生が終りになるか分らずにいるから、その人にとって、「晩年」とは案外、アイマイなものとなっているようだ。

波郷は「このまま順当にゆけば、必ず、それで死ぬにちがいない」と思っていたのであるし、また、そのとおりに死んだのであつた。

波郷にとっては、五十歳になるかならぬうち、日々はすでに「晩年」であつたと言ふべきであらう。

二

四十一年の入退院の前後から、四十二年にかけて、波郷は次のような句を作っている。

いくたび病みいくたび癒えき夷千両
病まぬ生より病める生ながし石路の花
母亡くて寧き心か霜の声
父亡き後けふ母亡しのふところ手
鳥飛んで松籟の上や横光忌
横光忌 枯芝の座を賜りぬ
「母亡くて」の母は、四十年の十一月に死去。この母について、**「惜命」**に、

春夕べ襖に手かけ母來給ふ
蝶燕母も來給ふ死に得んや
と詠んだ句がある。三十二年の春、郷里から、母が病床の波郷を尋ねてきた折りの句であつて、このとき、波郷は胸部

成形手術を受けるために、東京療養所へ入院することになっていた。作者の切迫した気持は「死に得んや」に明らかだが、十余年後の右の句では、年老いた母が逝つたことに安堵感のようなもの、母を嘆き、悲しませることからの解放感のようなものが詠われている。もっとも、「寧きころ」とは言うものの、己れのいのちの果てを見つめている気持は「霜の声」の季語にうかがえ、「思ひの沈んでいる作品である」と、村沢夏風は解説している（『酒中花』鑑賞）。

おなじく横光忌の句については、**「惜命」**に、

遠く寒く病弟子われも黙禱す

横光忌 黙契いよよ頑に

などがある。横光死後の二十年來、相変らず病みつづけ、また、亡師との默契に変わりはないものの、松籟の上に飛ぶ鳥を詠み、枯芝の上に座している横光忌には、どこか「歲月」がもたらした「放念」の感がある。

四十三年の八月に、波郷は東京病院から、京都の龜山恒子という女性に手紙を出している。この女性は波郷と同病の患者で、先づ、手術を受けたもののような。少し長い、次に引用する。

「前略。あなた様もたびは、ずい分ひどい目にあわれたものと同情に耐えません。でもよく耐え抜かれて、手術も終えられ御順調の日々を送ってられる由、ほんとうによかったと存じます。病氣になり危機をのりこえて、はじめて生の意義が体得できます。一々病氣してみなくても分るという方

もいられるでしょうが、われ／＼凡人は自分の身で体験しなくてはわかりません。そして、分った日はすでに人生は老年に入っているのでしょうか。それだからこそ、思い切った仕事もできるのかもしれない。

私も、昏睡状態になったりして、死ぬこともさほど恐ろしいとは思いませんでしたが、それでもやはり生きられるだけは生きたいと存じます。それが人間のつとめだと思えます。さしあたり、まずい句の一句もよけいに作りたいと念ずる次第です。後略。

前出の「病まぬ生より」の句の「生」には「よ」とかな文字が振ってある。これも村沢夏風の註釈によると、「生」には「よ」という読み方はないそうだ。普通なら「世」を使うところだし、意味的に言っても、この字を使っても変わりはないはずだが、波郷がここで「生」を使ったということは、生きてきた歲月ということを強調したかったためであらう、生をうけてきた時間というものを字面の上で残したかった故であらう、と述べている。

その人の「人生の終りの時期」を「晩年」、或いは「古い」と呼ぶとすれば、だれにも「晩年」「古い」は訪れるわけであって、だれにも共通する「晩年」「古い」などに格別の意味はないように思われる。人に老いをもたらす「世」は、だれにもおなじように経過するが、人がどのような「生」を生きたかは個性的だ。

「病まぬ生より病める生ながし」と詠んだ波郷の気持に

十の字にとぶ二羽の鳩草城忌

玉蟲舞ふ檉と樟との間にて

柿食へり食るに似しをゆるめ食ふ

鶴嘴をふりつつ歌や桃の花

右は『酒中花』収録。病状は一進一退の時の作品だが、些事としてとらえられている八朔柑も柿も、猫も鳩もみんなイキキした姿をしている。作者はベットのうななかに座って、八朔柑を剥いたり、柿を食っているわけだが、「指こそり」「食るに似しをゆるめ食ふ」と詠う作者に「晩年の枯れざま」は見られない。一個の柿をむさばるように食っていることに気がついて、その手を休める。そんな些事に人生の意義があり、それを詠むことで、老いの観念をうたうことなぞ余計である、そう納得している姿勢が波郷の「晩年の句境」と言っていだらう。

しどみはまだ小波の如雪残り

紫を置く窓一つ春の雪

立泳ぐさまに鳩寄る緑立つ

秋風や櫓の秀めぐる黄金蟲

霜の花小走りの猫散らし過ぐ

『酒中花以後』に見られるこれらの句は、「生命」の瞬間の輝きが、目前に迫っている「死」の陰翳を覆い隠している。

波郷にとつての「晩年」、或いは「晩年意識」とは、「自在なる詩精神」と共に、剩さず生きつくすことに他ならなかつ

は、彼にとつての、かけがえのなかった半生が意識されていたのであって、波郷は付け加えて言っている。「われ／＼凡人は自分の身で（生の意義を）体験しなくてはなりません。そして分った日は、すでに人生は老年に入っているのです。う。」

「晩年意識」は、はっきり、あらわれていると言うべきだ。

三

波郷は亀山恒子宛のおなじ手紙で、彼女から送られた「嵐山のゴリ」の礼を述べ、「食膳に早速賞味させて頂き、これだ／＼とよろこび舌鼓を打った次第です。こういうことも些事ではなく、人生の意義を体することがらではないでしょうか」と記している。食膳に乗った豆飯だの、冷奴だの、食前食後の白桃だの、ザボンだの、柿だの栗だのに舌鼓を打つことも、もはや「些事」ではなく、「人生の意義」に変わったと言っている。

「病室の窓に桜が二本見えて、いずれも満開です。コブシは花少なく、葉多くなりました。この部屋を出ない生活も長くなりましたが、そうなってしまうと、それもさほど不自然ではなくなっています。自在に生きてる詩精神、もうこれだけがたよりです」（四十四年四月二日付、今川七郎宛書簡）。

はるかなる地上を駆けぬ猫の恋
指こそり八朔柑を剥けり専念に

た。そういう「晩年意識」が、なぜ、

雪被つつ櫓は花の死すなかれ

鳥渡る尾長らは森はいくぐり

通草貰ひて楽しと思ひ憂しと思ふ

病院をよぎる登校児鳥渡る

というような句になるかを、読者に納得させるのは、なかなか、むずかしいことだ。

波郷死後、一か月ほど経って、あき子夫人の句集『見舞筆』が友人知己に配布された。波郷が生前に、企画編集したものだだったが、この句集には、子息の修大氏の挨拶状が添えられてあって、それには「これ以上よくはならないと言っていた父も、突然の死に、しまった」と舌打ちしたことと、然し、いまは苦しい息を吐く必要もなく、かえってホッとしているのではないかと思う。この句集は題名どおり、（母が）父の闘病生活を中心に詠んだものだから、暇な時に読み捨てて下されば幸いです」といった文面が認められていた。・低肺機能者のおちいる死を予期していた波郷にも、「死」は突然だった。「しまった」と舌打ちしたのは、実は修大氏なのだ、それを死者の思いに転化したのは、父の肉体と精神の在りようをよく承知していた肉親の愛情と、哀惜のあらわれにほかなるまい。

波郷の死は、年齢による衰弱死ではない。病魔は肉体を蝕んでいたかも知れないが、詩精神は最後まで、みずみずしく、自在に飛翔していたと言うべきであらう。